

やはりこの恋は間違っている。

Azalea

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルを短編集にした物です。駄文ですが、よろしければ読んでください。章ごとの話は別々の時間軸です。R—18になったらごめんなさい。

いろは√：after 2話目執筆中です。

雪乃√：3話目執筆中です。

陽乃さん√：2話目執筆中です。

目次

2話	1話	陽乃さん√	3話	2話	1話	雪乃√	a f t e r o l	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	いろは√
53	50		47	43	40		36	32	27	22	18	14	10	5	1	

いろは✓

1話

八幡sidestart

「せーんぱいつ」

(うわ……)

俺の大学でのベストプレイスに来たのはあざとい後輩、一色いろはである。

ちなみに今のベストプレイスは大学の喫煙所近くの茂みで覆われたところ。

「今うわ、とか思いませんでした?」

と言いながら俺の隣に座った。体が触れ合うほどに近くで。

「言つてない。あとあざとい」

「失礼ですね!あざとくなんて「なくはないだろ」むう」

「ところでですね、明日暇じゃないですか」

「いや知らねーよ」

「先輩のことですよ」

「……………、ああ、暇だが」

何故箸を落とした……………。しかも驚愕の表情を浮かべて俺を見ている。そして俺は無視してその落とした箸を拾い、いろはす(水)で適当ではあるが洗った。

「そんな…………、あの先輩が…………自分から暇だなんて言うなんて…………。なんですか誘ってるんですかそれとも誘ってほしいんですか確かに誘ってますけどやっぱり先輩から普通に誘ってほしいですお願いします。あ、あと箸ありがとうございます…………先輩の方があざといですよ」

俺の心情(ω・#)

最近俺を振り切れて無いしなあ、一色。しかも息切れするなら区切れよ。そして俺はあざとくない!断じて否だ!

「うるせえよ、はあ…………はあああ……………、……………あー、そーいや明

日お前の誕生日だったな。」

一色の顔が赤い。怒らせちゃまったかあ。でもたまには信じるのも一興か。今更どんなことあったって変わんねーしな。

「明日、うちに、来い。じゃあな」

そう言い残し俺はここを後にした。

なんか命令形で言ったらぞくぞくした！

色々目覚めそう！

八幡sideout

いろはsidestart

先輩が私の誕生日を覚えていてくれてた。しかも先輩から誘ってくれた。いざとなったら脅……穏便に話し合いで説得しようと思っていたのに。あんなに強引に言われたら行かない訳にはいかないじゃないですか。先輩のばか、ボケナス、八幡、大好き……。

そのまま1人残された私はそんなことを考えて更に赤くなる。むしろ血が出てきそう。色んなどころから。私はそのまま1時間過ごしてしまった。

それに……、先輩に命令された時ぞくぞくきちゃった……。私ってそういう性癖なんですかね？

いろはsideout

八幡sideRe:start

ついあんなことを口走ってしまった。なんであんなこと言っちゃったんだろうか……。はあ、なんて言い訳しようか。言い訳なんてできないけど。来るかどうかは別として午後の講義サボって準備するかー。一年前までの俺だったら絶対そんなこと言わなかったな。

ああ、今更後悔。でも一々小町に色々言われそうだし黒歴史掘り起こされそうだし。仕方ないと割り切ろう。

それにしてもあの頃の俺はあんなことを何故言ってしまったんだ。

『俺は……俺は……それでも……それでも、俺は……本物が欲しい……』

なかなかいいのではないだろうか。

「あ、それ良さそうですね。それでお願いします」

「かしこまりました。包装致しますのでしばらくお待ちください。」
意外と高かった。まあ、一色が喜んでくれればそれでいいんだがな。

八幡 side Re : out

いろは side Re : start

その日の授業は全て頭に入らなかった。授業だけでなく友達の話も、知らない男子共の話も(これはいつも聞いていない)、知ってる男子共の話も(これもいつも聞いていない)。つまり、頭に残っているのは先輩に明日誘われたことのみだ。何してくれるんだろ。濡……興f……。楽しみだなあ。

私がかんなのになったのは先輩のせいだ。先輩のせい先輩のせい先輩のせい先輩のせい！

もつと一緒にいたい話したい色々なところに行きたい。

そして、どんなことでも受け入れたい……。

そんなことを考えてた私はいつの間にか自分の家に着いていた。

先輩のこと考えてると時間過ぎるのが早いなあ。

あ、私から同棲の提案してみようかな！この想い、もう止められない。明日、私は先輩に言う。この想いを伝えて……。私はフラれるんだろう。先輩は私を妹みたいに扱ってるしなあ。でも勇気を出して……。

いろは Re : out

2話

八幡side start

さて、小町を総武高校まで迎えに来たわけなのだが。

小町がいないし来ない。連絡すらない。

〃リンゴンリンゴン♪〃

小町からメールが届いた。何故分かったか。それは妹専用の着信音だからだ。簡単だろ？

さてさて、内容は……

To：お兄ちゃん

From：小町

title：ゴメン！

text：ゴメンねお兄ちゃん！生徒会のお仕事で終わるのが6時頃になるかもなのでどこかで暇を潰してきてください！できるだけ早く終わらせまーす！

ふむ。生徒会か、なら仕方ない。さっさと返信を……

To：小町

From：八幡

Title：生徒会なら仕方ないだろう

text：了解。生徒会、頑張れよ。早く終わったら連絡くれ。

さて、あと1時間半だ。どこで暇を潰してきて来ようか。

カフェ、気分じゃない。本屋、一昨日行った。映画、時間が足りない。

色々試行錯誤（してないけど）した結果、このまま本を読むことにした。もし寝落ちしても小町なら気付くだろう。

俺が読んでいるのは〃暇人、魔王の姿で異世界へ〃だ。まだ1巻の途中だが、なかなか面白い。あらすじ？めんどくさいから自分で調べてくれ。

〃堕ちる海爆ぜる空零れ消えても〃♪

艦これの映画の主題歌。ということは一色か。

めんどくさい。なんか言われそうだし。まあ、あんな事言った手

前、無視するわけにはいかないか。

「どうした」

『ええと……先輩……』

「なんだ」

『ええとですね……』

いや早く要件言えよ

「おーい、一色？どうした？」

『あ、明日何時にお邪魔すればいいですか……？』

ああ、明日の事か。来るのか。なら無駄になることはないな。よ
かった……。

「10時以降ならいつでもいいぞ」

『わかりました。また明日です……』

なんか覇気がないな。いつものあざとさはどうした」

『あざとくないです！』

声にでてたか。まあ、そこまで元気があるなら大丈夫だな。

ああ、一色が頬を膨らませている姿が見える。

「そういえば俺の家って教えてないよな？」

『いえ、小町ちゃんに聞きましたよ？』

「そ、そうか。ならいい。じゃ、また明日な」

『……』

「どうした、まだ何かあるのか？」

『いえ、何でもないです。先輩、ではまた明日』

「おう、また明日な」

『……』

「……」

『……』

「……」

『……』

「切らないのか？」

『先輩こそ』

「……」

『……』

ふと窓の外を見る。小町がニヤニヤしながら俺を見ていた……。

「げ……」

『どうしたんですか？先輩』

「い、いや、なんでもない。また明日な」

返事を聞く前に切る。そして窓を開け、未だにニヤニヤしている小町に話しかける。

「おう、小町。早かったな」

俺が選んだのは無かったことにすることだ。

それに対して小町は、ニヤニヤしながら無言で助手席に乗り込んだ。

「……」

この沈黙が痛い。その間に車を走らせる。この車結構高かったんだよなあ。宝くじ当たらなかつたら買わなかつたほどに。当たったと言っても1等とかではないんだけど。秘密にもしてるし。小町にすら話してない。色々怖いしな。

「なあ小町」

「それで、用事ってなあに？」ニヤニヤ

「それなんだがな、明日明後日、俺の家に誰も来ないようにして欲しい。い r …とある人の誕生日でな、俺だけに祝って欲しいと言われてな（嘘なんだけど許せ、小町）」

「ほーん？明日…… “い” から始まる名前の人……うーん、いろはさんかな？」

Σ:(;´。´ω´。´):ギクッ

「その反応は当たりっぽいね。まあいいよ、お義姉さん候補の皆様に知らせておくよ」

「助かる。で、小町よ、アイスとプリンどっち食べたい？」

「分かってないねくお兄ちゃん。りよ・う・ほ・う・だよ」

なんて無茶な。まあいいけど。ハーゲンダッツ2つにプリン3つかな。

「ローソンのでいいか？」

「いーよー、小町は車で待つてるねー」

スマホをカツカツ叩きながらのんびりとした口調で言った。

「ああ、分かった。2分で戻る」

俺はそう小町に告げて車を降りた。

ローソンで手に取ったのはプリン3種1つずつ、ハーゲンダッツはストロベリーとバニラにした。

相変わらず高え……。

でも、それで小町の喜ぶ顔と協力が得られるなら安いもんだな。

俺が車に戻ってきた時、

「そういえば用事ってそれだけならメールか電話でも良かったよね？」

Σ:(;´。´ω´):ギクツ

「き、気の所為だよー、小町ちゃん」

「まあ車楽だしアイスとかも買ってもらえたからいいけどねー」

八幡side out

いろはside start

10時以降か。ちよつと早くてもいいよね？楽しみだなあ。どんなことしてくれるんだろ。初めて先輩から誘ってくれたんだから期待してもいいよね。どんな些細なことでも嬉しいんだけどね。実はもうすでに嬉しい。

それにしても先輩って自分から電話切る人じゃないのか。てつきりすぐ切ると思うってたんだけど。私も自分からは切らないことが多いから先輩に催促されるまで待つてた。でも先輩は最後〃げ……〃って言った後はすぐに切っちゃった。せめて返事聞いてから切つて欲しかった。

私〃は〃までしか言えなかった。言いたかったのは〃はい、また明日です！楽しみにしてますね！〃って。

……ちよつと早いけどお風呂入る。早く寝て朝から念入りに準備しなきゃだし。

サービスシーン？ないよ？

い
ろ
は
s
i
d
e
o
u
t

3話

いろはsidestart

今日は6時に起きた。もう少し寝てても良かったんだけどなんかこれ以上は寝れなくて。楽しみだったのかな？いや楽しみなんだけど。だから服を選び始めた。たぶん今、ニヤけてるんだろうなあ。こんな時にお母さんが入ってきたらどうしよう。絶対からかわれそうだなあ。まだ先輩のこと秘密にしてるし。でもバレてるかもなんだよなあ。たまに私のこと見てニヤニヤしてるし。お父さんにはバレてないだろうけど。あ、あとでお父さんにおねだりしない！あ、でもでも先輩のお家でお泊まりになるかもだし……。うー、どうしよ。うー、とりあえずシャワー浴びよ……。

「あら、珍しいわね、こんなに早く起きてるなんて」ニヤニヤお母さんがニヤニヤしながら部屋のドアから覗いていた。

「な、な、な、お、お母さん……」

「誕生日おめでとう、いろは♪で、今日はデート？」
「う〜」

顔が熱い。真っ赤なんだろうなあ。

「わかりやすいわね〜、いろはったら♪」

「うー、シャワー浴びてくる！」

お母さんのバカ！私はとりあえずこの状況から逃げて頭を冷やすことにした。

あ、サービスシーンないからね？（2回目）

いろはsideout

八幡sidestart

さて、一色のために飯を作るわけなのだが。

何を作ろうか。パスタか？パスタでいっか。あと簡単なサラダでも作っておけばいいだろう。適当っぽいけどちゃんとやるからね？

あ、メール入れとくか。着きそうになったら連絡くれ、ぐらい。

To : 一色

From : 比企谷八幡

Title : (なし)

text : 今日着きそうになったら連絡くれ。

1行。まあいいや。あ、スマホ充電しなきゃ。あと6%しかない。飯食った後どっか行くかもしれないしな。めんどくさい。アニメみたい。とりあえず送信。まだ送信してなかったのかよ。あ、そういやまだ7時じゃん。飯の準備にはまだ早いけど、下ごしらえぐらいしておくか。生野菜サラダなら作り置きしといっても大丈夫なはず。

レタスを適当な大きさにちぎり、きゅうりを乱切りする。玉ねぎをそれなりに薄く切り、トマトをカットする。トマト?.....。俺のここには入れないでおこう。アボカドも適当に。これくらいで充分だろ。あ、サーモン入れるか。あとはラップして冷蔵庫に入れて、俺の朝飯を作る。朝飯何にしようかなー、だるいし納豆でいいや。

you get a mail!

誰だよ、俺にメールしてくる奴。小町ではないことは明らかではある。まあ一色だろうが。まだ早いし。あれ?でもこんな早く起きるの?あいつ。まあいいや。

To : 先輩

From : 愛しの後輩いろは

title : Re :

text : 先輩ーい、やっぱり迎えに来てもらってもいいですかー?
?

細かいところまでは分からないんですよー。

いいですかー?いいですよねー?来て下さいねー?

ほんとに一色だった。結局迎えに行くのかよ。じゃあもうデミグラスソース作るか。あと温めるだけ、ってどこまで持っていこう。つとその前に返信。

To : 一色

From : 比企谷八幡

title : Re : Re :

text: 了解。10時前後に行く。着く頃にまた連絡する。

相変わらず事務的だな、って？馬鹿野郎、俺が女子高生みたいなキヤピキヤピしたようなメールなんざ送ってみろ、キモがられた上に通報されて終わりだ。

顔文字とかめんどくさいしな。絵文字もだるいし。

さて、さつさと終わらせて迎えに行くのか。

今更だが、めんどくさいな。でも雨降ってるしな。仕方ない。ついでに飲み物も買ってこないとだし。買い忘れたからな。酒は飲ませなけりやいいだろ。俺は飲むがな。もぎたてとワイン、美味しいぞ♪
……………、自分で思ってたんだがキモイな。

そういや俺、酒飲むから帰り送れないな。あいつを1人で帰すかけにはいかんからな、一応、泊まりの準備しておくか。一応だからな！歩いて送ってけって？車だと早いけど歩きだと遠いんだよ！

八幡sideout

いろはsideRe: start

ピロリン♪

メールだ。先輩からかな？いや先輩しかいない。

だってアドレス変えたんだもん。先輩以外からのメールなんてほとんど興味ないし。あ、小町ちゃんからは別ね♪雪ノ下先輩と結衣先輩からは全くと言っていいほどメール来ないし。

さてさて？

To: 一色

From: 比企谷八幡

title (なし)

text: 今日着きそうになったら連絡くれ。

え！それだけ！まあ、先輩らしいといえれば先輩らしいけど。んー、外雨降ってるし荷物も多いからやっぱり迎えに来て貰おう！

To: 先輩

From: 愛しの後輩いろは

title: Re:

t e x t : 先ぱーい、やっぱり迎えに来てもらってもいいですかー？

細かいところまでは分からないんですよー。

いいですかー？いいですよねー？来てくださいいねー？

これでよし！あんまり可愛くしすぎるとあざといとか言われちゃうしねっ！

……。遅い。なかなか返信が来ない。実際には数分しかたつてないけど、なんか長く感じる。

うー。

ピロリン♪

あ、来た！

T o : 一色

F r o m : 比企谷八幡

t i t l e : R e : R e :

t e x t : 了解。10時前後に行く。着く頃にまた連絡する。

事務的だなあ。先輩だから仕方ないけど♪そんなところもす……
気に入ってるから。

♪

いろはs i d e R e : o u t

4話

八幡side start

さて、一色の家にもうすぐ着くわけだが。

「9時23分」

案外早かったな。準備出来てるか聞くか。

To：一色

From：比企谷八幡

title：なし

text：なんかかなり早く着きそうなんだが準備出来てるか？

そういうえば愛しの後輩いろはから一色に変えた。ちよつとイラツと来たというか何というか。めんどくさかったから変えないでも良かったんだが。

車の中暖めておくか。外、意外と寒かったしな。

〃落ちる海爆ぜる空零れ消えてもく♪〃

電話だ。もちろん一色から。

「おう、どうした」

『先ぱーい、今どこですかー？』

「もう着きそうだ。まだ準備出来てないならどつかで暇潰してくるが」

『わかりましたー、じゃあ外に出てますねー』

それを聞くと同時に一色の家に助手席を向けて車を止めた。

コンコン

「せーんぱいつ、おはようございますー！」

あざとく敬礼しながら立っていた。母親と一緒に。

「……………、お、おはよう…」

車から降り少しばかりの礼をする。や、頭を下げるただけだけど。数秒して頭を上げるといr…一色が驚愕の表情をしている。

「あなたがいろはの。ふうん？」

俺を見透かすように見ていた。なかなか怖い。居心地も良くはない。

「比企谷八幡です」

一応噛まずに言えたが。

「よろしくね、八幡くん♪」

親子であざといのかよ。てかママはす意外と若いのな。

結構驚いたわ。

「…はい、よろしくお願いします」

なんか近くで車のドアを閉める音が聞こえた。その音に振り返ると一色が助手席に乗り込んでいた…。

「あらあらふふふ♪と…ころ…で、いろはとはどこまで行ってるのかな?」

な、なんてことを聞いてくるんだこの人…。

「せんぱーい、まだですか?」

声がした方を見ると一色が助手席の窓を開けて若干ではあるものの、身を乗り出していた。ちよつとエロい。

「ちよつと待ってくれ。」

全然進んでませんよ。付き合ってすらいませんから。だからといって遊びではないんですけどね。」

てか雨に濡れて寒くなってきた。そろそろ解放してくれないかな。

「及第点。まあいいでしょう。いろはをよろしくお願いしますね?」

「は、はい」

と言い運転席に乗り込む。そして暖房をより効かせる。だって寒いんだもん。帰ったら風呂だな。

「いってらっしゃい、いろは」

「い、いってきます…。」

それを聞いてからアクセルをゆっくり踏んだ。

八幡 side out

いろは side start

先輩車持ってたんだ。意外だなあ。免許だけ取るかそもそも免許

取らないものだと思ってたし。先乗ってよつと♪

何も言わずに入ったけど大丈夫だよね？

うわー、キレイにしてるなー。しかも高そうだし意外と広い！小町ちゃんの言葉借りると、いろは的にポイント高いです♪先輩！

ところで、先輩まだかな？いつまでお母さんと話してるんだろ。しかも雨の中、傘もささずに濡れて。風邪ひきそうだな、先輩。でも車の中暖かいから大丈夫かな。あれ？先輩、なんで車の中暖かくしてるんだろ。車の中が寒かったから？それにしてもそれは暖かすぎる気がする。

……、先輩だし私のため、とかかな……。それだといいな……。

そして……。先輩！いつまで話してるの！ほんと風邪ひいても知らないですよ!?!助け舟でも出しましょうか。

「せんぱーい、まだですかー？」

「ちよつと待ってくれ。」

全然進んでませんよ。付き合ってすらいませんから。だからと行って遊びではないんですけどね。」

せ、先輩、なんてこと言ってるんですかー！

「顔が赤くなるのを感じる。」

「及第点。まあいいでしょう。いろはをよろしくお願いしますね？」

お母さんもなに言ってるの!?!

「は、はこ」

と言い運転席に乗り込んだ。

先輩……。

「いつてらつしやい、いろは」

「い、いつてきます……。」

私が言うと同時に発車した。

先輩は私のことどう思ってるんだろう……。どうしても考えてしまふ。結衣先輩と雪ノ下先輩とはどうなったんだろう。こう考えるのも何度目かもうわからない。

昔では有り得ないことを今、先輩はしている。そのことを自覚して

いるのだろうか。

考えだしたら限りがない。疑問もいくつも浮かんでくる。

聞いてみよう。

「先輩、今日はなんで私を誘ったんですかー？ 今までの先輩なら断つてたじゃないですか」

「別に。断ると色々手回しされそうだからな。それなら自分で誘ってダメージを少なくした方がいいと考えた」

先輩らしい理由だった。結局、先輩は私のことどう思ってるのかな。それだけが胸から離れない。帰る時間が最後、って思っておこう。もしかしたら先輩が私を『本物』にしてくれるかもしれない。期待しますからね！先輩♪

いろはsideout

5話

八幡sidestart

「せんぱいって免許と車持ってたんですね」

唐突にそんなことを聞いてきた。

「まあな、学費免除のお祝いと宝くじの結果でいい車買えたからな」
実は免許ではなく、車が先だったりする。

「へっ!?宝くじですか!?!」

当然の反応をありがとう。

「まあ、1等じゃないけどな。2等だった」

「……………」

「……………」

「せ、せんぱーい、私を養ってくださいい♪」

……………は?コイツは何を言っている。逆に俺を養え。や、そんなこと
言わねーけど。アレだな、帰す直前に言っただけか。落としてから上
げるやつだな。そのあとでまた落とすのが好きだったりする。

「……………生意気な、言っとくが40過ぎたら俺は働かないぞ、たぶん」
結局言っちゃったようなもんだよ。

「ええ……………なんでですか……………」

なんだどうした?ガチで引いてるじゃないですか。俺なんか最低
なこと……………、言っただけ。うん、心当たりしかない。とりあえず謝ろう。

「あー、なんかすまん。まあ、信頼できるやつだったら養っても構わ
ないんだけどな。小町とか戸塚とか」

と言っただけの頭を撫でる。

あと一色とかな?

前みる、前。自分でツツコンじやったよ。

「い、いえ、別に……………。ていうか恋人とか作らないんですか……………」

信頼できないなら邪魔だしな。

てかいつもより一色の髪の毛の撫で心地がいい気がする。撫でやすい
位置にあるつてのもあるのかね?」

「着いたぞ」

…………。あれ？返事がない。ただの屍のようだ。酷いな、俺。元からだけど。

一色をみる。

寝てんじやん。あれから2分もたたずに着いたのに。寝るの早くないすかね？

「もう少し寝かせておくか。疲れてるかもしれないしな」

車の中の温度を確認する。

21度くらいか。

暖房は……このままでいいか。

「撫でてやるか。上から目線でなんかアレだけど」

そして撫でてるうちに俺も意識を手放した。

八幡 side out

いろは side start

「うにゅ……う？」

あれ？私は何を……？ていうか頭に何か乗ってる気がする。

私はそれを掴み目の前に持つてくる。

「手……う？」

せんぱい？

ん？あれ？ほんどこどこ？

あたりを見渡した。

え、獣人にドラゴン……？

なーんてことはありませんでした。

異世界転生って面白そうじゃないですかー。なので、言ってみたかったんです♪

異世界転生って言葉よく知ってるなって？先輩の好みとか知りたかったんですよー！

でも、隣にイタ車あるんですよー♪獣耳っ娘っていうんですかね？そういう感じの。

ささて、先輩起こしますか。

「せんぱーい、起きてくださーい」

揺さぶるが、起きない。やがて……。

「ひゃっ!？」

せ、せんぱいの頭が……、私の肩に……。

ちよ、ちよーつと幸せすぎてよくわからないな、この状況。なん
でこうなったの？

「せんぱーい、起きてくださいよー」

「うう……」

！起きたかな？

「~~~~~!!?」

せ、せせせ、せんぱいが……／／／

先輩が……

だ、抱き着いてきた……／／／

しかもちやつかり頭をずらし、ポジションを探している。

幸せすぎるからもう少しこのままいよう。起きた時の先輩の反応
も楽しみだし……。

「すう~~~~」

?!?!

「はあ~~~~」

ちよちよちよちよちよちよちよ!

そ、そういうのやめてよ!?!先輩!!

先輩に匂い嗅がれた……。もうお嫁に行けない……。

「……いろ、は……」

ツ!?!起きた!?

「すう……」

寝言か。夢でも見てるのかな、私の名前呼ぶくらいだから私が出て
るのだろうか……。それだったら嬉しいな……。

「……、I, m t h i n k i n g a b o u t y o u, いろは……」

は?..え?

顔が熱くなっていくのを感じる。だって、先輩が発したその言葉は……。

「私はあなたをいつも想っている」

先輩がみている夢だとしても。その言葉は私に響いた。だから私も

「私もいつも想っていますよ、先輩♪」

そしてその言葉は……。

いろはsideout

小町sidestart

そっかー、お兄ちゃんもついにいろは先輩に伝えるのかー。気になるなー。お兄ちゃんがどんな事を伝えて、いろは先輩がどんな反応をするのか。

明後日問い詰めてみましょうー！

あれ？もしかしたら2泊するかも？うーん、一応水曜日に聞こう！水曜日は生徒会ないし！メールいれとこーつと。

To：お兄ちゃん

From：小町

title：なし

text：水曜日空けといてねー。

これだけだけどいいよね？お兄ちゃんだし。

小町sideout

雪乃sidestart

あれは……、一色さんと比企谷君？それにあの女性は……？

比企谷君、一色さんを選んだのね。

はあ。今日は姉さんと飲み行こ……。

雪乃sideout

6話

八幡sidestart

うとうととした眠りから覚めた。寝言を言っていたような気がするが気の所為だろう。

さて、起きるか……。

と、その時。

「……私もいつも想っていますよ、先輩♪」

「へ……う？」

寝言か？寝言なのか？一色よ。

一気に意識が覚醒し、ガバツと飛び起きる。

「せん、ぱい？」

え、起きてるの？この娘。え、何？さっきの本気なの？

あれ？ていうか俺一色に抱き着いてた？は？は？は？

通報されてないかな……。

「……起きてたんですか？」

俺が黙っているとそう聞いてきた。怖い、怖いいろいろはす。

「え、ええと……いろいろはさんがアレを言う直前に目が醒めました」

そういうと一色の顔が物凄い勢いで赤く染まる。

「責任」

ん？なんて？

「責任とってください、先輩。ちようど両思いつぽいですし」

は？コイツは何を……。何故俺が一色が好きだと知っている。心を読めるのか？

まさか……寝言を……？

「寝言、言ってたか？」

「ふえ？」

「俺は今さっき、寝言を言っていたのか？」

俺は寝言のことを聞いて後悔した。

「……え、ええと…、はい。I'm thinking about you、いろは」と……」

そう聞いて。

首から上がかなり熱い。真っ赤つかなのだろう。

“I'm thinking about you”までなら言い訳も出来ただろう。落として上げるパターンでフォローもできる。

しかしそこに“いろは”まで追加してしまったらしい。そこまでいくと言いつ訳はできない。もうここで言ってしまった方が良いだろう。

「そうか。なら……。」

ふう。一息ついて。

「俺は一色が、一色いろはが好きだ。車の中じゃムードもひったくりもないけど、計画も台無しになっちゃったけど、俺は一色いろはが大好きだ。よければ、俺と……結婚前提で付き合って欲しい」

言った。言ってしまった。後悔はしない。もう後ろは振り返らない。これでふられたらしばらく立ち直れないだろう。2度と誰にも自分の気持ちを告げないかもしれない。

でも……

それでも……

一色の……

一色いろはの……

答えが知りたい……。

瞑っていた目を開けた。

一色は……、泣いていた。目を見開き、顔を涙と崩れたメイクで汚し泣いていた。

「ほんと、ムードも何もありませんね、先輩。不束者ですが、こちらこそよろしく願います、先輩！」

泣きながら、笑った。

俺がこいつを見てきた中で一番の笑顔だった。この笑顔は生涯、いや、死んでも忘れないだろう。

もう離さない。守りたいと決めたもの、本物だと思えるものを……。

俺と一色はしばらく抱き合い、泣いていた。

「風呂入ってくるからそのへんで寛いでてくれ。台所には入るなよ」

「え？あ、はい？なんでお風呂なんですか？」

「さつき雨の中会話してたからな、車の中にも寒くてな。すまんな、せつかくの誕生日なのに」

「い、いえいえ、お母さんもお母さんなので……。ではいつてらっしゃいます」

「ああ、いつてくる」

八幡 side out

いろは side start

先輩、お風呂ですか。覗く？お背中お流します、とか言つて入りちやう？で、でもさすがに今はきついですね。また今度の機会にします。

いろは side out

八幡 side Re: start

「待たせたな、準備してくる」

「私も手伝いますよー？」

「いや、お前の誕生日だろうよ。あと彼氏になつての初仕事奪おうとするなよ」

あと暖めるだけなんだけどな。

ただプレゼントとケーキが台所にあるからな。

「なんか実感ないですねー。まさか先輩から告白してくるとは思いませんでしたしー」

ソフアーに腰をかけながらそんなことを言う。

「そうか？俺は元々今日言うつもりだったけどな。予定が早まっただけ」

生野菜を運ぶ。

「そうなんですかー？それにしても結婚前提ですかー。幸せな気分ですなー。」

え、俺結婚前提まで言っちゃったの？

別にいいけど。そのつもりだったし。

「幸せなのは同感だな。まさか一色が俺を好いてくれるとは思わなかったし。寝言聞かれたのは一生の恥というか黒歴史だが」

スパゲッティをザルにあける。

「でもそのおかげでこうやって恋人と恋人の誕生日を迎えられたんですからいいじゃないですかー。もうこれ自体が最高のプレゼントですよー！」

「ま、それもそうだな。一色ー、こっち座れ。飯できた」

「せんぱーい、そろそろいろはって呼んでくださいよー。せつかく恋人同士になったんですし」

ポケットにプレゼントを入れ、ケーキを運ぶ。

「善処する」

「先輩って料理できたんですね、意外です。ていうかケーキも手作りなんですか？」

「もちろんだ」

即答する。

「味の保証はしかねるがな」

「そこはちゃんと保証してくださいよ……」

「まあたまに小町に食べて貰ってるから料理の方は大丈夫だろ、ケーキは知らんが」

ジト目で睨んでくる。あれ？俺なんか言った？

「せんぱーい、いくら妹さんでも女の子の名前は出しちゃダメですよー？」

「お、おう、すまん」

そういつてカーテンを閉め、ロウソクに火を灯す。そして電気を消した。

「いろは、誕生日おめでとう」

いろはは火を消す。そういえばバースデーソング歌ってないけどいいよね？

そして立ち上がりながらケーキの前にプレゼントを置いた。

深呼吸しろ。落ち着け、俺。

電気をつけた。

「え……？なんですか、これ」

「まあなんだ、誕生日プレゼントだ」

顔が熱くなるのを感じる。

顔赤くなりすぎじゃない？気の所為？

「開けても？」

「なんのための誕生日プレゼントだと思ってるんだよ……」

そつとりボンを解き箱をあける姿を座りながら見つめる。

「髪飾り、ですか……？」

「似合うかどうかわかんねーけどな」

「つけても？」

「そのための髪飾りだ」

一色がその髪飾りを付ける。その亜麻色の髪に白い花びらの髪飾りは生えた。

「どう、ですか……？」

恐る恐る、というのだろう。聞いてきた。

しかし、俺はその言葉を聞いていながらも反応できなかった。

「……」

「先輩？」

「あ、ああ、似合ってる、か、可愛いと、思う」

見蕩れていたのだ。反応できなくなるのは仕方ないだろう。

「そ、そうですか」

いろはの顔が赤くなった。

「さて、食べようか」

八幡sideRe:out

7話

八幡side start

「いただきます」

いろはがスパゲッティを巻き、口まで運ぶ動作を肘を付き、眺めていた。

後に聞いたが、その時の俺はあたかも司令官のようだったらしい。

「先輩、そんなに見られると恥ずかしいです」

「お、おお、すまん」

と言いつつもいろはを眺めている。

「うう〜」

顔を真っ赤にして唸り始めた。

やばい、めっちゃ可愛い。あざといと思っていた部分もかなり可愛く見える。

しかし、いつまでそのスパゲッティを食べないつもりなのだろうか。感想が聞きたい。

「うう〜……、よし」

覚悟を決めたようだ。

不味いわけではないと思うんだがな。

いろはがスパゲッティを口の中に入れた瞬間、表情が変わった。驚きの表情がうかんでいる。

「美味いか？」

「先輩ってこんなに料理上手いんですか!?!めっちゃくちゃ美味しいじゃないですか!」

興奮した様子で言う。

褒められるのもなかなか嬉しいものだ。それが可愛い彼女から、となると余計に。

「そうか、なら良かった」

いろははどんどん口にスパゲッティを運ぶ。

「もうちよつと落ち着いて食えよ」

「ふあっふえほいひいんふえふほん」

なんて言ってるのかわかんねーよ。

「飲み込んでから喋れ、な？」

「だって美味しいんですもん。こんなに美味しいスパゲッティ、食べたことないですよー！」

「お、おう、そうか、それは良かった」

久しぶりに褒められた気がする。小町は俺の料理食べようとしな
いしな。何それすごく悲しい。

以降、というよりこのスパゲッティを食べている間、会話がなされ
ることはなかった。

八幡 side out

いろは side start

はうう、先輩が見てくるよお。しかも司令官っぽくてカッコイイ
よお。そんな表情魅せられたらもう堕ちてるのに更に堕ちちやう
よお。

ううう。

「先輩、そんなに見られると恥ずかしいです」

「お、おお、すまん」

謝るなら見ないでくださいよー。ていうかまだ見てるよお。

「ううう」

それでも先輩は私から視線を逸らさない。

「ううう」

覚悟を決めよう。

「よしー！」

フオークに巻いたスパゲッティを口の中に運ぶ。

瞬間、その旨味が口の中一杯に広がった。

美味し過ぎじゃないですかね!?

こんなの初めてですよ!?

「美味いか？」

美味いっつもんじゃないですよ！やばいですよ！凄いですよ！

「先輩ってこんなに料理上手いんですか!?!めっちゃうくちゃ美味しいじゃ

ないですか!」

今の私はすごく興奮しているだろう。でも美味しいんだから仕方ない。

悪いのはこんな美味しい料理を作った先輩!

もう他のスパゲッティなんて食べられないですよ!

「そうか、それなら良かった」

美味しすぎて箸が止まりません。箸じゃなくてフォークだけど。

「もうちよつと落ち着いて食べよ」

「ふあつふえほいひいんふえふほん」

あ、私としたことが。飲み込んでから喋るべきだった。

「飲み込んでから喋れ、な?」

「だって美味しいんですもん。こんなに美味しいスパゲッティ、食べたことないですよ!」

「お、おう、そうか、それは良かった」

いろはsideout

八幡sideRestart

あつという間に残りはキーキだけになった。

「そういえばいろは、今日泊まっていくのか?」

荷物多いからたぶん泊まっていくだろうと思ひ声をかける。

「はい、泊まってもいいなら泊まります」

「わかった。後で布団出しておくわ」

と言いながら席を立ち、いろはの皿と自分の皿を下げた。

「でも、先輩なら帰れって言いそうでしたけどね。どうしたんですか?」

「……一緒に、いたかったから、かな」

暑っつい。顔を中心としてすごく暑い。

「せ、せせせ、先輩が……デレた!」

「うっせえ」

はあ。

戻ってくる際に小さめの皿を2枚と包丁、小さいフォーク等を持

ち、いろはの前に皿を置く。

「ケーキはあんまり自信がないから期待しないでくれ」

ケーキを切る色とりどりのフルーツをふんだんに使ったフルーツケーキだ。

「なんか嫌いな果物でもあったか？」

「いえ、果物はなんでも食べますよ」

林檎、蜜柑、オレンジ、マンゴー、葡萄、桃、そして苺。

旬の果物とそうでない果物使ってるからどんな味になってるのかわからない。

「食べてみてくれないか？」

「いただきます、先輩」

いろははゆっくりとフォークを持ち上げ、ケーキを一口サイズに切り、そして口へ運ぶ。

そして、いろはは頬に手を当て、うつとりとした表情をうかべた。

「どうだ？」

「……」

「……、おーい？」

いろはが固まっている。

返事がない、ただの屍のようだ。

「……………はっ！先輩……………」

「どうした？不味かったか？」

「いえー！とっても美味しいです！先輩、なんでもできるんですね！」

ちよつと違うけどあの台詞を言うチャンス！

「なんでもはできないよ。できることだけ」

「でも先輩、高校の頃、私が1年生の時、葉山先輩とテニスして当たり前のように、しかもほぼ1：2で圧勝してたじゃないですか」

そういえばそんなこともしたな。

「うん、やったことあった気がする。でも途中から雪ノ下も入ってた気もする」

「そうでしたっけ？」

いやそこもちゃんと覚えておけよ……………。

「まあでも雪ノ下がいなくてもギリギリ勝てたと思うけど」

「いやいや、先輩、無双してましたよね……。アレには正直引きました」

「いやいや、なんでだよ。いや、その方がありがたいけど」

えと、いや、まあ、アレはちよつと酷かったからな。自分でもそう思う。

「あの時は葉山一筋だったもんな。あのあと葉山が泣きながら謝って来てたな。その時は無様だなあ、と思ってしまった」

「うっわ、先輩えつぐいですね。鬼畜ですね」

ケーキを口に運びながら器用に言う。

「でも海老名さんを中心とした腐女子に、な？うん、色々あったんだよな……」

「あー、うちのクラスでも比企谷さんの鬼畜攻めと葉山先輩の受け、つて流行ってました」

「うっわ最悪。一番きつかったのはあのあと陽乃さんと雪ノ下と由比ヶ浜から色々言われたことと正座させられ、その上に重い本を乗せられたことなんだよなあ」

俺は立ち上がり、風呂を沸かすためのボタンを押した。

「でも結局は良くやったって言われたな。あれ以来葉山に勝負を挑まれ続けたが」

窓により遠い空を、灰色に濁った空を見上げながら。

「負けなかった」

と呟いた。

八幡sideRe:out

8話

八幡sidestart

「いろはー、風呂入ってこいよ」

お風呂が沸いたことを知らせる音を会話の終了とし、促した。

「はーい、洗濯物はどうすればいいですかー?」

「任せる」

「先輩、任せるってどういうことですかー?」

それはそれはニコニコでとても良い笑顔であった。

「自分で洗うもよし、籠に入れておくのもよし、洗わず持って帰るもよし、って感じか?」

正直自分で洗ってもらいたいが。

「じゃあ先輩に任せますねー。そのうちこっちに引越すかもですしー」

「あー、りよーかい」

……………

あ?」

「今なんて?」

「そのうちこっちに引越すかもですしー」

あーうん、まあいいや。空き部屋片付けておくか。でもめんどくさいな。

「引越してくるのはいいが空き部屋の片付け手伝って貰うぞ」

あ、でも大学卒業したら喫茶店貰えるんだよな。

まあいいか、それはその時考えよう。

「りよーかいですつ、せーんぱいっ!」

「さつさと風呂入ってこい」

あざと可愛く敬礼するとかけていった。

荷物持っていかなかったけどいいのか?

一応届けに行くか。

シャワーの音もし始めたし大丈夫だろう。

しかし俺はもつと深く考えるべきだった。

何故なら……

「いろ……は……」

全裸で背を向けているいろはの姿があったからだ。

何秒こうしていただろうか、先に動いたのはいろはだった。

俺の手を掴むやいなや引っ張ったのだ。

「せんぱーい、一緒に入りたいならそう言ってくださいいよお♪」

目が、笑っていなかった。

そして、鳩尾に衝撃が走ったと同時に俺の意識はあっさりと刈り取られた。

八幡sideout

いろはsidestart

先輩に裸見られた！つい殴っちゃったけど大丈夫かな。

一応運びたいけど私にそんな力ないしなあ。うーん、引っ張って行こう。

「んしょ」

そういえば今先輩が目覚めたらまた殴らないといけないんだよね。まだ裸だし。

ん！そだ、お風呂場に戻る前にキスしよう、おでこにだけど。まだ目覚めないでね……。

ふと、引っ張られる感覚が。

そして私はいつの間にか先輩の胸の中にいた。

あれ、逃げられない？

「いろ……は……」

ギョツと抱き締められる感覚。

「はうう」

見事に身動きが取れない。

どうしょ、ま、先輩だし、もう見られてるし　　いつか。

「せんぱーい……」

私は先輩の首に手を回し抱き着いた。

どれだけこうしていただろうか。未だに先輩の力は弱まらない。

「せんぱーい、そろそろ離してくださいよー」

そうは言ってみたものの、離してくれなかった。それどころか若干ではあるが、力が強まった気がする。

「ん……」

先輩が起きた。

「何してんの、いろはさん。しかもなんで裸？」

「先輩に見られて、殴っちゃいまして、気絶した先輩をここまで運んだら引つ張られて抱き締められて身動きが取れませんでした♪」

「そ、そうか。すまん、風呂行ってこい。目、閉じてるから」

先輩はそう言うとはんとに目を閉じた。

「せんぱーい、離してくれないとお風呂行けませんよー」

「え」

ようやく抱き締めていたことに気づいた。

「いろは……」

あれ、抱き締める力が更に強くなった!?なんで!?

「……愛してる……」

え、今愛してるって……? 凄いな小さな声だったけど愛してるって言わなかった?

顔がすごく熱くなる。

「せんぱい、私も愛してますよ♪」

先輩がピクツとする。

「え、何、聞こえてたの?」

「はい、バツチリと」

先輩の顔が赤くなると同時に背中に回されていた腕が解かれ、先輩の顔を隠した。

「先輩」

ちよっと開いた隙に、私は

チュツ

「んっ」

「んむ!?」

私はせんぱいにキスした。

「んふ、んん……んっ」

初めてのキスがデープになるなんて思わなかった。

キスって……こんな気持ちいいんだ……。

幸せ。もう離れたくない。

「せんぱあい」

少し離れて息を吸って、先輩が口を開いた瞬間に再び口付けする。

もう先輩なしじゃ生きていけないかも。

何分、いや、何十分こうしてキスしていただろうか。

私から唇を離し、こう言った。

「せんぱいっ、私をこんなにした責任、取ってくださいね♪」

「ああ、いくらでも取ってやる」

いろはsideout

〈Fin〉

a f t e r o l

カランカラン。

ドアが開く音がした。お客が来たようだ。まあ、接客は余程のことがない限り一色任せなんだが。

「いらつしやいませ〜♪カウンター席で宜しいでしょうか？」

一色はトビつきりの営業スマイルでお客を迎える。

「ええ、カウンター席でいいわ」

どつかで聞いたことある声だなあ。やだなあ、雪ノ下とかとは会ってないからなあ。

メガネ掛けていこう。

「すみません、ミルクティーと卵サンドを」

「かしこまりました」

カウンター席に座られると俺が注文取らないといけないのが嫌だ。最近慣れてきて噛むことはなくなつたが。

ていうか来たの雪ノ下じゃん。何してんの、こんなところで。お前の家この近くだっけ？

「ミルクティーです」

「ありがとう」

メガネって偉大だな。気付かれないとは思わなかったぞ。一色はもうバレてそうだけど。

「貴方、比企谷君？」

「ち、ちちち違いますよ？僕はせ、仙代といいましゅ」

噛みまくりじゃねえか。てかメガネだけじゃ無理なのか。

「隠さなくてもいいじゃない。それにホールをやっているのは一色さんかしら？」

「んでわかつたんだよ……」

ボヤきながらメガネを外す。

「知ってる？普通の喫茶店にはマックスコーヒーはないのよ？」

なん……だと……!?

マックスコーヒーがない喫茶店なんてただの喫茶店だ。
や、どっちも喫茶店だけどき。

「まあ、小町さんに聞いたのだけれどね」

ああ、ビビって損した。そりゃ分かるわな。

「せんぱーい、何バレてるんですかー」

「小町がバラした」

「小町ちゃんが……。なら仕方ないですねー」

知り合いにバレずに運営したかった……。

「それにしても久しぶりね、比企谷君、一色さん」

「ああ、久しぶりだな、雪ノ下」

「お久しぶりです、雪ノ下先輩」

話しながらも手を動かす。パンを切り、卵を焼く。

一色と雪ノ下が喋ってるなんて意外だな。奉仕部では必要なことばかりだったからな。

「卵サンドです」

「ミルクティー美味しいわ」

「ありがとうございます。雪ノ下様に喜んで貰えるなんて光栄です」

「先輩（比企谷君）気持ち悪いです（わ）。あと違和感しかないです（わ）」

酷い。久しぶりに会った雪ノ下からもいつも一緒にいる一色からも罵倒されるなんて。

「俺が気持ち悪いのはデフォルトだ」

自虐ネタを挟む。メガネを掛けてニコニコ笑顔で。

何故かメガネを掛けて笑うと顔が赤くなる人多いんだよなあ。一色とか一色とか一色とか女性客とか。

今も林檎みたいに赤くなってる。

「すみませーん」

「一色、仕事だ」

「あっはい」

一色に仕事だと言うとすぐに復活するからありがたいんだが、他の女性客にはどうしようもないんだよなあ。

目の前にいる雪ノ下とか。

「雪ノ下、帰ってこい？」

「せんぱい、ブレンドコーヒートショートケーキを」

ショートケーキはケーキ用のショートケースに入ってるから一色にやらせている。だが今の俺にとつてブレンドコーヒートって意外と難しいんだよなあ。

はあ、だる……。

雪ノ下が停止してから5分、ようやく雪ノ下が復活した。

「おお、ようやく復活したな、雪ノ下」

「おかえりなさい、雪ノ下先輩」

「え、ええ」

雪ノ下が動揺するなんて珍しい。レア度が高いな。そこまで高くないわ。一色のトビっきりの笑顔の方がレア度高い。写真集にしたままである。一色の笑顔撮ったことないけど。

「卵サンドも美味しいわね」

「先輩ですからね！」

なんでお前が喜んでんだよ……。

「なんで一色さんが喜ぶのかしら」

「いつもの事だ。ほっとけ」

「そう」

それから沈黙が続く。さっきの客は今は勉強している。

一色は豆を炒っている。

「そろそろ帰るわ。次は由比ヶ浜さん達を連れてくるわね」

「これ以上知り合いを呼ばないでくれ……」

「ふふ、いやよ」

なんて笑顔だ……。いい笑顔のはずなのに凄く悲しい。

「今日は奢ってやろう」

「あら、ありがとう。珍しいわね」

「うっせ、さっさと帰れ」

「ご馳走様。また来るわ」

「またお越しください」

「また来てくださいねー、雪ノ下先輩」

「先輩、お疲れ様です」

「ああ」

19時以降は客足が一気に少なくなるので、一色に先に上がらせている。俺は20時半までいるが。

一色はその間にお風呂に入り、ご飯を作ってくれる。

美味しいのだが、待たせるのも悪いと思ってしまう。

もう少し早めに終わらせようかね？

「先輩、ご飯にしますか？私にしますか？お風呂にしますか？私にしますか？」

それとも、私？」

「私率高くね？ご飯をお願いします」

「……ヘタレ」

聞こえてるんだよなあ。鈍感難聴系主人公じゃないからなあ。

それに週4でやってるじゃないですか……。忙しいから仕方ない。

なんか結婚したけどくっつけて感じない訳だな。

「今日はシチューです！」

「いつもすまないねえ」

「それは言わない約束ですよ、先輩っ」

「そうだったな。んじゃ、いただきます」

「どーぞっ♪」

雪乃✓

1話

「ああ、疲れた……」

英語話すとかだるすぎだろ……。

会社近いのはポイント高いけどよ。

あれ、何階だったっけ？

ああ、最上階か……。

ああ、小町の手料理食いてえ…。

《すみません》

あ？どっかで聞いたことあるような声だな……。

そういえば、雪ノ下達元気かねえ。

「はあ、だる……」

《貴方、日本人ですか？》

「あ？ああ」

やっぱりどっかで聞いたことあるような声なんだよなあ。凜々しくて鈴のような綺麗な声。

俺の少ない、むしろ零に等しい友人……知り合い関係から推測すると雪ノ下しかいないんだよなあ。でもこんなところに雪ノ下がいる訳ないだろうし、偽物……似たような声の持ち主だろう。

「こんなところで何をしているのかしら？比企谷君」

「は？雪ノ下？」

下に向けていた視線を上げる。

確かに雪ノ下に似ている。というよりとある部分を除いてあの頃のまま成長した雪ノ下と言った方がいいだろう。

「人の顔も忘れたのかしら？それよりこんなところで何をしているのかしら？比企谷君。2回目よ」

「こっちで金融会社の主任やることになったんだよ……。ああ、日本に帰りたい」

帰って小町の手料理食べて食っちゃ寝したい。

「あなた、本当に比企谷君？私が知っている比企谷君は専業主夫志望で主任なんてできる人ではなかったと思うのだけれど」

この毒舌も久しぶりだな……。

「うっせ。色々あったんだよ。にしても、久しぶりだな、雪ノ下」

「ええ、久しぶりね、比企谷君」

「で、雪ノ下は何故ここにいる。ここには誰もいないと思ってたのに、ぼっちを謳歌しようと思ってたのに」

俺は熱を持つのを感じ、狭いエレベーターの中で顔を逸らす。

「あなたらしいわね」

ぼっちを謳歌しようと思ってたなんて嘘だ。

寂しいとも思っていた。

「あなた、料理はしてるの？」

「美味しく感じないけどしてるよ」

「なら今日は久しぶりにあなたに作って貰おうかしら」

いやなんでだよ。

「なんでそうなるんだよ……」

「なんとなくよ」

なんとなくか。ならしやうがないな。

「和風と洋風と中華。どれがいい？」

「なんでもいいわ。それにしても意外ね。あなたなら色々言い訳をするかと思っていたのだけれど」

「なら洋風にするか。まあ、こっちに来てからは寂しかったから、な」

こっちに来てから仕事仲間すらできず、ただの上司と部下の関係。飲み会は誘われても行かない。行ったとしても楽しくない。楽しめない。
ない。

「あなたがそんな弱みをだすなんて」

「弱ってる自覚はあるからな」

「ふふ、なら今日から私が一緒に食べてあげるわ」

ガラス張りのエレベーターを昇り、最上階に着いた。

雪ノ下も最上階なのかよ……。

「俺は残業ばっかでこんな時間に帰れるのは希だぞ」

「仕方ないから待っててあげるわ。あとで鍵頂戴？」

柔らかく微笑む。その表情に、俺は、俺の凍りついていた心は少し、溶けた気がした。

「お前、いつからそんな冗談を言えるようになったんだ？」

「あら、本気よ？」

「ふつ、本気なら俺の部屋から勝手に持ってけ。玄関にあんだろ」

たぶん玄関にあったはず。部屋には誰も呼ばないから鍵を放置してても問題ない。たぶん。

「そう。ではあと20分したら行くわ」

「鍵開けて待ってる」

最上階まで同じはまだ良かったが、まさか部屋が隣だとはな。

よく気付かなかったものだ。

まあ、うちの会社がブラックすぎるのが悪いだろうが。

朝は7時には部屋を出て、7時半には会社につき、すぐに仕事を始める。夜は8時9時なんて当たり前。休みはないに等しく、体調を崩しても無理してでも会社に行き、仕事をする。

だから風邪とかめっちゃ長引くんだよなあ。

さて、着替えてさっさとシャワー浴びて飯作るか。

2話

「お邪魔します」

俺がちょうどトイレから出た時に雪ノ下が入ってくる。

「おう、邪魔するなら帰れ」

「……なら帰るわ」

少し寂しそうに言った。

「ごめんなさい俺が悪かったから帰らないで」

「素直になりなさい？」

「お前にだけは言われたくねえ……」

と言つて鍵を雪ノ下に渡す。

「ほれ」

「あら、本当に鍵を渡すなんて。馬鹿なの？」

「お前が寄越せつて言つたんだろうがよ……」

「ふふ、ありがとう」

柔らかに微笑む雪ノ下は、奉仕部にいた頃とは大違いで。その微笑みに思わず見惚れてしまった。

いや、奉仕部にいた頃にたまにみせた笑みもかわ……素敵だったんだけど。

「いつまで私を見ているのかしら？……不満はないけれど……」
後半は聞こえなかったからスルーして。

「み、みみみみ見てないですよ？」

「その喋り方気持ち悪いわ。あと気持ち悪い」

「素直になれよ、雪ノ下」

呟いた瞬間、脛に鈍く重い痛みが走った。

つまり、雪ノ下に蹴られた。

「いつ!？」

暴力ダメ絶対……。

「貴方が余計なことを言わなければいいのよ」
心読むなよ!

「わかりやすいのよ」

……。もういいや。俺はこいつに勝てる気がしない。高校の時からそうだったけれども。

「さて、飯作るか。お前は……なんかしてろ」

「なんかって何よ……」

「ソファーで寛いでるなり俺の部屋散策するなりなんでもいいぞ」

うわあ、奉仕部にいたころは絶対こんな台詞言わなかったわあ。

「じゃあ貴方の料理してる姿を見てるわ」

やめて恥ずかしい。

「冗談よ。手伝うわ」

「客はのんびりしてろ」

「いやよ。久しぶりに比企谷君に会ったのだし」

恥ずかしい台詞もじゃんじゃん言うようになったなコイツ。調子狂うな。

「お前、変わったな」

「そうね、私も変わったわ」

「も？」

誰を指しているのだろうか。

「比企谷君よ」

俺？そんな変わってないと思うんだが。

でも何故か否定する気にはなれない。

「あの頃は弱さを出すことはなかったもの」

「なんでだろうな。人は簡単には変わらないって言ったのに、こんなにも簡単に無意識に変わっている」

今している作業を止め、そう呟いた。

そして……

「お前に会いたかったのかもな」

俺は冗談めかした口調で言った。

「そ、そう」

「顔、赤いぞ」

顔真っ赤にした雪ノ下が可愛い。今までこんなこと言えないし考えもしなかったことなのに。

「貴方も顔が赤いわよ」

「どうやら俺はクサイ台詞を言うのも言われるのもまだまだ慣れていないらしい。」

「ま、彼女も友達もいなかったから当たり前なのだが。」

「*****」

「結局カレーなのね……」

「し、仕方ないだろ、なかったんだから」

「リビングに漂う香りはカレー。シチュー作るつもりだったのにな。」

「仕方ないんだよ。食材は別としてアレがなかったんだから。」

「いただきます」

「どうぞ」

「雪ノ下がカレーを掬い、口に運んでいく。その口は、唇はとても柔らかそうだった。いやいや、何考えてるんだ俺は。」

「比企谷君、食べづらいのだけれど」

「気にすんな」

「気にするから言っているのだけれど……」

「彼女はふう、と一息つく、その可愛らしい口にカレーが吸い込まれた。」

「美味い？」

「ええ、美味しいわ」

「なら良かった」

「そこに刺々しい笑みはなく、心底幸せそうな笑みが浮かんでいた。」

「今更だけれど、余計な物はないのね」

「本はラノベもあるけどな。むしろラノベの方が多い」

「私が言ってるのはそこではないのだけれど……」

「知ってるよ」

「ここにあるのは本を除けば最低限な物しかない。このマンションには不釣り合いなほどに。」

「……、これも寂しくなった原因なんだろうな……」

「何か言ったかしら？」

「キョトンと首を傾げる雪ノ下について答えるのが遅れてしまった。」

「…いや、なんでもない」

首をぶんぶん振って答えると、彼女の目が細められ、疑惑の視線を送ってくる。

……やだ、そんなに見つめられると照れちゃう。うわ、キモ。流石にキモいわ。自分で考えてなんだけど。

「や、お前が可愛いなーって」

「そんな棒読みで言われても嬉しくないわ」

いやいや、顔を真っ赤に染めてそんな事言われても説得力皆無だから。むしろ余計に可愛く見えるから。

「顔、真っ赤だぞ?」

からかってみたくなる仕草してるのが悪い。

「あう……」

え!?何この子!めっさ可愛いんですけど!あう……とかめっさ可愛いんですけど!いつの間になんか可愛くなったの!?

「んだよその可愛い声……。勘違いして告白して振られちゃうだろ」

「……別に、勘違いしてくれてもいいのだけれど……」

ボソツと、独り言のように、俺に聞こえないように呟いただろうその声は、人間観察で鍛えられた耳に届いてしまった。

勘違いしてくれてもいい、と言われてはいそうですか。と襲うほど俺は馬鹿でも屑でもない。だけどこの変な空気を払拭するための努力はしてみようか。

「酒、飲むか?」

「私を納得させることができるワインはある?」

俺をからかうように言ったそのセリフ。

ふっ、ぼつちの社畜を舐めるな。悲しくてワインをボトルのまま煽ることもあるのだぞ……。はい、関係ないですね。

「これはどうだ?」

そう言って差し出したワインに、雪ノ下は

「なっ、貴方……」

とりあえずは驚かせることは出来たようだ。

3話

「これはどうだ？」

そう言つて差し出したワインに、雪ノ下は

「なつ、貴方、それは……」

とりあえずは驚かせることは出来たようだ。

「どこにでも売つてる市販品じゃない……」

「んな高いもん買わねえよ。ただえさえここのマンション高いのに」

「なら、私と……住む？」

とんでもない爆弾を落としてきた。むしろ核爆弾。

しかも安物のワインを飲みながらなんてこともないように。ワイングラスを持った雪ノ下がごく絵になつて。じゃなくて、

「いやいや、大人の男女が交際もしてないのに同棲とかアウトだろ……」

「私はそうは思つてないわよ？」

「や、そうじゃねえだろ……」

きよとんと首を傾げる雪ノ下。24になつてもこの可愛さとは
いったい……

「だめ、かしら……？」

寂しそうに目に少しの涙を浮かべて俺を見上げてくる。だからと
いって同棲を認めるわけにはいかない。

「鍵渡したんだからいいじゃねえか……」

「でもお金はかかるでしょう？」

ぐぬぬ、だからといって同棲するわけには……

「あ、ごめんなさい、貴方には将来を共にする人がいるかもしれないなかつたわね。鍵も返すわ……」

え？ 将来を共にする人？ いたら社畜やってねえよ。……はあ。折れるか。

「……わあつたよ」

「えっ？」

「同棲、すればいいんだろ？」

寂しく曇った顔が一気にパアッと光るような笑顔にかわった。

「じゃあ荷物持ってくるわね！」

え、こっちに住むの？いや文句はないけど。

「ん、手伝う」

「比企谷君はもう寝なさい。明日も朝は早いのでしよう？」

「だからといってお前にやらせるわけにはいかねえだろ。体力ねえんだし」

体力がないことを指摘すると、雪ノ下はムツとした表情になる。

え？何、違うの？

「それは6年も前の話よ。今は違うわ」

でももう日付変わるぞ。はあ。

「いいから今日は寝ろ。暇な日に手伝ってやるから」

暇な日、ないけど。

「暇な日なんてないでしょう？」

「今日はもう酒飲んでるんだ。やめとけ、じゃない、やめろ」

「……………わかったわよ」

しぶしぶ頷くと、さっきまで座っていた椅子に再び腰掛け、ワイングラスを手に取った。

若干顔赤くなってるけど大丈夫なのだろうか。酒に弱いならもう寝かせないと…………。

「もう酔ってんだろ？帰ってねr…………」

「すう…………」

もう寝てた…………。はあ、床で寝るか。

椅子に座ったまま寝ている雪ノ下の膝の裏と背中に手を回し、そつと持ち上げる。所謂お姫様抱っこというやつだ。いや、言い訳をさせず貰うとこれ以外の持ち運び方が思いつかなかったんだよ。ていうか、誰に言い訳してるの？

それはおいといて、足で若干開いていた寝室の扉を開き、雪ノ下をそつとベッドに寝かせる。そして寝かせてから気付いた。

「毛布掛けられねえじゃん」

はあ、と一つため息をつき、クローゼットの中から予備の毛布を取り出し、それを雪ノ下に掛ける。

そして……

「俺の分ねえじゃん」

今日の俺ダメダメじゃねえか。まあいいや。コートでも掛けて寝るか。暖房も付けときやなんとかなるだろう。

っと、一つ忘れてた。アイツも寝てるんだしこれくらい許してくれるだろう。襲わないだけ感謝して欲しいくらいだ。

「おやすみ、雪ノ下」

そっと頬を撫で、寝室を後にした。

その寝室には少女のような寝顔で頬を赤く染めた雪ノ下が毛布に包まり、悶えてたという。

陽乃さん✓

1話

『痛い！』

公園の奥の方から聞こえてくる女性の悲痛な叫び。

俺は、何故かその叫び声をした方へ向かっていった。誰か知らない女性なはずなのに。俺の足は言う事をきかず、公園の奥の方へと歩いていった。

『へへっ、大丈夫だって。痛いのは最初だけさ』

襲っているだろう男は下卑た笑みを女性に向けているのだろう。撮影じゃない限りは。まあ、そんな可能性なんて全くと言っていいほどないのだが。

『ひっ……。助けて……。助けて、比企谷君！』

聞こえた俺を呼ぶ声に、思わず駆け出した。

冷静に考えろ。雪ノ下さんと適わなかった相手に俺が正攻法で勝てるわけが無い。

ならどうするか。最適解を探せ。

考えろ。俺ならどうするか。捨て身、雪ノ下さんが勝てなかったのに俺なんて秒殺だ。意味無い。助けを呼ぶ。間に合わない。……。助け？

『へっ、こんなところに誰か来るわけねえだろ！』

『大人しく俺らに使われとけ！』

……。これがここで導き出せる最適解。

これならなんとかなるはず……。『

おまわりさん！こっちです！』

あたかも警察が来たかのように叫んだ。

だが、それでもまだ足りないだろうと考え、走って足音を犯人に聞かせる。

『げ、警察。お前ら、逃げるぞー！』

『ちっ』

ボスだろう男が命令をくだし、それに反応したしたっぱは舌打ちをした。

「待てー！」

一応声も貼っておく。もちろん声は変えたよ？ちよつと低くしました。

「怪我はないですか、雪ノ下さん」

「ひき、がや……君？」

「はい、そうです。とりあえず服は……破かれていますか。ならこのパーカー使ってください」

俺はすぐにパーカーを脱ぎ、雪ノ下さんに掛け、フードを被せる。しかし、雪ノ下さんは服だけでなく、スカートまで破かれている。本来ならズボンも渡したいところなのだが、予備のズボンなんて持ってきてるわけがない。つまり、ここでズボンを渡したら露出狂扱いされてしまうのだ。だから……

そう考え事をしてしていると、胸にやや強めの衝撃が走った。

下を見ると、雪ノ下さんが俺に抱きついていていた。

「怖かった……。怖かったよ……。比企谷君」

いつもの強化外骨格が壊れ、涙を流していた。

適うと思っていた男に自分の力が通じなかったんだ。怖いと思わない方がおかしい。そんなやつはレイプ願望のあるやつだけだ。少なくとも雪ノ下さんはそんな性癖の持ち主でない。……はず。

「もう大丈夫ですから……」

左手を背中に回し、右手を頭にのせ、泣き止むまで、そつと撫で続けた。

「比企谷君」

まだ声が震えているが、先ほどよりはまだいいだろう。

「ありがとね」

「たまたま通りかかっただけです」

手の届く範囲でしか助けられないから……。

「それでもありがと……」

「とりあえず家に行きますか」

「……まさか、こんな私を…襲う、の?」

「いやいやいや、なんでそうなる?」

「えと、うん、うん。」

「ならそのままの格好で帰りますか? 襲われて、そのままの格好で」

「はい、お邪魔させていただきます」

「最初からそう言えばいいんですよ」

「比企谷君のくせに生意気な」

うっせ。

気を使えないから冗談で紛らわしてんだよ。

「おんぶ」

「はい?」

「おんぶが何? しろと?」

「お姫様抱っこでも可」

「いやいや、それは俺の体力的に無理だわ。」

でもパーカーを羽織って破かれたスカートを腰に巻いている姿を他人に見せるわけにはいかない。まあでも俺の家に行くにはどうしても1回は大通りを通らなきゃいけないのだが。

「どうぞ乗ってください」

「うん、ありがと」

そう答えた雪ノ下さんの声は、再び震えていた。

この日、俺は怒りという感情が心の奥底で芽生えた気がした。

そしてこんな目に合わせた陽乃さんを絶対に守ると決めた。

2話

誰にも見られることなく、俺が住んでいるアパートについた。雪ノ下さんは泣き疲れたのか、背中でごっすり眠っている。いや、ごっすりかどうかはわからないが。こんなんで安心できたなら嬉しいなあ。さすがに襲われたのに男の背中で安心できるのかはわからない。そもそも男性恐怖症になるんじゃないの？

さて、部屋に着いたわけだが。

この子どうやって下ろそう。寝てるくせしてギュツとしがみついているから引き剥がせないんだよね。それに背中に2つの柔らかい膨らみが当たって理性の限界なんだよなあ。や、襲われた人を襲うなんてそれこそ男性恐怖症になるだろうからしないし、そもそも俺にそんな度胸ないし。ヘタレだし。人を無理矢理犯すのは趣味でもないし。何言ってるの俺。なんで性癖暴露しちゃってるの？

とりあえずこの子起こさないと。

「雪ノ下さん、着きましたよ。起きて降りてください」

しかし返ってくるのは沈黙。とりあえずベッドに座るか。疲れたし。

……、やっぱり腕使えないから横になろう。うん、あとその方が楽だしな。

ああ、着替えてないしシャワーも浴びてないから寝るのに抵抗あるなあ。せめて雪ノ下さんの腕の力が弱まればなあ。たぶん弱まらないけど。

脱いだら脱いで雪ノ下さんに恐怖を植え付けかねないし。

電気もこのままで寝るか。雪ノ下さんが起きないのが悪い。そういうことにしよう。

「せめていい夢見てくださいね。雪ノ下さん」

僅かに雪ノ下さんの体温が上昇した気がするが気の所為だろう。自分の体温かもしれないし。

そんな暖かさにいつしか意識を手放していた。

朝。意識が浮上してくると、背中 of 暖かさはなくなっていた。そのかわり美味しそうな料理を作っている音と香りがする。……、腹減った。そういや、冷蔵庫になんか入れてあったつけ？何もなかった気がするんだが……。まあ雪ノ下さんだからな。余り物で何か作るくらい余裕だろう。

それにしても今日は雨か。本屋でも行こうかと思っていたが雨の中家出たくないからな。このまま寝てよう。っとその前にシャワーでも浴びてくるか。

ベッドからのつそりと這い出たのらりくらりと歩き、寝室のドアを開ける。

「おはようー！比企谷君」

テンション高くないですか、雪ノ下さん。

「……………おはようございます」

「比企谷君、いつもに増してテンション低くない？」

雪ノ下さんのテンションが高いだけですって。朝はこれが普通。俺にとっては。

「……………気の所為ですよ、雪ノ下さん…………」

「絶対気の所為じゃない…………」

「シャワー浴びてきますね…………」

「あ、うん、いつてらっしやい？」

何故に疑問形？

まあいいや…………。

「ん…………」

腕の中にある温もりに、私は微睡みながら目を開けた。

「えっ…………」

腕の中にいたのはなんと、比企谷君だった。

なんで比企谷君が私の腕の中にいるの!?

内心焦っていたが、ギリギリ叫び声をあげることにはなかった。

「昨日何があったんだっけ…………」

公園で散歩していた後の記憶がない。

「少なくとも起きてはいたと思うんだけど……」

うーん、やっぱり思い出せない。あとで比企谷君に聞いてみよう！

比企谷君を起こさないように布団を捲り、ベッドから降りると、私は服をパーカーしか着ていないことに気付いた。

「ッ!？」

ふ、服着てないってことはやっぱり……。

でも、比企谷君だし……。

そもそも比企谷君は雪乃ちゃんのもの……。

え？ええ？

ちらりと比企谷君の方の布団も捲る。

服着てる。

どういうこと？

うーん……

「とりあえず朝ごはん作ってあげよう！」

無理矢理笑顔を貼り付け、私は比企谷君の寝室を後にした。